

寒夜の即事（寂室元光）

風は寒林を攪して霜月明かなり

客来つて清話し三更を過ぐ

炉辺に筋を闇いて芋を煨くを忘れ

静かに聴けば窓を敲く葉雨の声

風攪寒林霜月明 客來清話過三更
爐邊闇筋忘煨芋 静聴敲窓葉雨聲

解説 山中の趣致と山僧の境涯を述べたもの。

語釈 ※即事Ⅱ即吟に同じ。その場において詩歌を作る。またその詩歌。※寒林Ⅱ冬枯れの林。寂しい森。※霜月Ⅱ寒月。※清話Ⅱ清談。俗世をはなれた話。※三更Ⅱ夜を五更に分けた第三の時刻。今の午後十二時およびその前後一時間をさす。※煨Ⅱ芋は里芋。さつまいもではない。煨は熱灰に埋めて焼く。※葉雨Ⅱ雨のように降る落葉。

通釈 時おり風がざわざわと、冬枯れの林の枝を鳴らして過ぎ、霜が降りた晩なので、ことに月の光は冴え冴えとしている。このような山寺にも人の訪ずれることがあつて、浮世ばなれをした話に時の移るのも忘れ、気がつけばもうとうに夜半すぎ、さすがに腹も空き、寒さも増してきたことゆえ、熱い焼芋でもと思ったが、おや、また誰か来たらしく、戸をほとほと叩く音。今時分、また誰がきたのだらうといふかり、炉ばたに火箸を置いて、しばし、耳を澄ませば、なんと、それは雨のように降りそそぐ落葉の音であつた。